



No.88 2020.11.6

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

“Meet de 対話 Part2”が終了しました

10月27日(火)に“Meet de 対話 Part 2”の第3回目が開催され、計3回の“Meet de 対話 Part 2”を無事に終わることができました。熊本市のICTを活用した授業動画をみながら、本市での導入に向けての対話を行いました。その3回の対話の中で、学校や校種をこえたこうした対話が必要だということに参加していただいた先生方には感じていただけたのではと思います。そして対話の中で、各校の現状を共有しながら、導入されてから“使う先生、使わない先生が”出てこないように“習うよりも慣れろ”の精神で、校内でできる事から準備を始めていくことが必要だという方向性が見えてきました。その準備として、機器の操作方法だけでなく、これからの時代に必要な資質・能力を明らかにしながら、どのような学びを今後つくっていくかといった対話も始めていくことの必要性を感じとられたのではと思います。詳しくは本所指導主事・千原指導主事より報告させていただきます。

また参加していただいた先生方からこうした対話の場は継続してほしいというお言葉もいただき、この指とまれ方式での開催のよさを改めて感じました。

“Meet de 対話 Part 3”の開催に向けての準備を始めるとともに、新たに“Meet de Cafe”(仮)といった月1回1時間程度のオンライン飲み会的対話も企画してみたいと考えています。また近いうちにご案内させていただきます。

「Meet de 対話 Part2 No.3」の対話をとおして

「Meet de 対話 Part 2 No. 3」に参加いただいたみなさん、貴重なご意見をいただき大変有意義な時間になりました。ご参加いただきありがとうございました。

進行の立場から「Meet de 対話 Part 2 No. 3」を振り返ります。

No. 3の論点

今回の論点は、①タブレット端末導入に向けた研修の持ち方、②タブレット端末を活用することへの意識の準備についてでした。

①タブレット端末導入に向けた研修の持ち方、については、No. 1、No. 2でも話題にあがりました。No. 3に参加された先生方も、「自分自身、機械に苦手意識がある」、「自分が機械を扱えるか、どう活用できるか不安である」、「子供が使う前にまず自分が慣れておきたい」という声が上がりました。そのような意見は、私も強く共感できました。指導者が操作に不慣れな状態でタブレット端末を授業に持ち込んでしまっただけでは、そのよさを引き出すことは到底不可能であると考えます。その点については、今後市教委としての課題でもあると認識しています。しかし、No. 1～No. 3まですべて参加してくださった2名の先生から具体的で、実現性の高いご意見をいただきました。

(1)「気が付いた先生」から発信できる研修のスタイルを定着させる

これは中学校に勤務されるI先生からいただいたご意見です。研修となると、多くの学

校が研修担当、教研担当もしくは教育課程担当という分掌の先生からの発信で研修が実施されます。しかし、タブレット端末の活用については、必ずしもそのような分掌からの発信でなくても、問題意識を持った先生からの発信でよいという考えです。確かに、先生方それぞれの専門分野、得意分野があるのでそれを生かした活用の仕方というのは大変効果的だと考えます。これまでのような担当からのトップダウン型の研修のスタイルは今後も必要だと考えますが、状況に応じて、「気が付いた先生」から発信する横のつながり発のボトムアップ型の研修も時代のスピード感に対応する上で大変有意義だと感じました。

(2) 授業研究など、これまでの手法に ICT をプラスしてそのよさを引き出す

これは小学校に勤務される T 先生からいただいたご意見です。T 先生は、これまで熊本の ICT 教育実践事例を全職員に公開されるなど、タブレット端末導入に向けての研修に積極的に取り組まれています。加えて、T 先生は校内の授業研究会に ICT 機器を活用した新しいスタイルにも挑戦されています。このコロナ禍で、全教職員が同じ学級に集まって参観することは望ましくないという状況を踏まえ、ICT 機器を用いて時間差を設けた参観を可能とされました。これにより、全教職員が無理なく、参加できることが可能となるだけでなく、同じ場所に集まらなくても同じ情報を共有することができます。また、このような研修を行うことにより、教職員が ICT 機器の多様な活用方法を知り、授業での活用場面をイメージできるというメリットも生まれます。

以上のようなお 2 人の先生のご意見をいただき、校内の先生方に向けた研修の持ち方について、明るい兆しが見えました。

②タブレット端末を活用することへの意識の準備、については、「ICT 機器を活用した教育活動への迷い」、「これまでのアナログ教育の利点」、「熊本市の実践に対して半信半疑」という言葉が出されたところから始まりました。このことについて、ある小学校から参加された Y 先生の話が大変印象に残っています。Y 先生は「タブレット端末等デジタルでできるよさと、これまでのアナログのよさを互いに活用していく」とおっしゃいました。先日、読んだ文献の中で文部科学省科学技術・学術総括官、合田氏も同様のことを述べていました。

「従来の社会構造の中で行われてきた『正解主義』や『同調主義』から脱却しなければならない。そのために、一斉授業か個別学習か、履修主義か習得主義か、デジタルかアナログか、遠隔・オンラインか対面・オフラインかといった二項対立の発想を脱して、子供たちの状況に応じてこれを適切に組み合わせる活かすハイブリッド教育による個別最適な学びと社会とつながる協働的な学びを実現することが求められている。」(2020, 教育展望 10 月号, 合田哲雄)

Y 先生のおっしゃったこととのつながりを感じずにはられません。これを踏まえても、私たちは、これまでの指導を投げ捨てる必要もなく、同時に ICT 機器を活用した教育を拒む必要はないのだと確信します。これまでの指導方法と合わせて ICT 機器を最大限活用し、これからの子供に必要な資質・能力を意図的・計画的に育てていくことが私たちに求められる力だと考えます。そのためには参加された N 先生もおっしゃっていた、「まず一歩を踏み出す」ことが重要だと思います。私にとっても大変学びのある機会となりました。次の機会にまたみなさんと対話できることを楽しみにしています。たくさんご参加くださり、ありがとうございました。

(文責：本所)

j a m b o a r dを使った記録をしてみても

第3回目は、j a m b o a r dを使った対話の記録にチャレンジしました。付箋で書き込むか手書きで書くか迷いましたが、付箋で書き込むことにしました。いざやってみると、付箋への書き込みの方がキーボードで打ち込めたので、落ち着いて記録できたように思いました。発言を箇条書きにするだけでなく、対話を図に表していく中で、今後の課題がはっきりしてきたように思います。ただ、対話の深まりに応じて付箋を色分けし、図的にまとめて表現していくところが難しかったです。このような対話の記録は、今後も積極的に取っていくべきだと思いました。

課題としては、付箋に発言のすべてを書くのではなく、要約して書いていくことが大切だと思いました。参観者が見てぱっと対話の流れが分かり、新たな発見があるような図をめざしていきたいと思いました。



(文責：千原)

夢文庫あさぎりさんのチャレンジ

10月28日(水)に夢文庫あさぎりさんでZ o o mを使ってオンライン読み聞かせの

テストが行われました。朝霧小コミュニティ・スクールで夏に開いたZ o o m体験会に朝霧夢文庫さんの皆さんが参加されていました。Z o o mでのオンライン体験会をしていただく中で、オンラインでの読み聞かせができればいいですねといった話をしていたのですが、その後、まず一度テストを試みようということになり今回のテストとなりました。オンラインでの読み聞かせの準備をする中、著作権問題等、動き出してみないとわからない課題が見えてきました。今回は出版社さんとの話の中でコミセン内という外に出ない形でテストを行えることになりました。いざ始めて

見ると音声が入らなかったり、聞こえにくかったりとトラブルはいろいろとありましたが、メンバーの皆さんがいろいろとアイデアを出し合って読み聞かせ会のイメージを共有することができました。私も今回のテストでいくつか宿題をもらったので、次回のテストに向けしっかり準備したいと思っています。あれこれと考えていないでまず動き始めることの大切さを改めて感じました。



(文責：北本)

“未来の教室オンラインキャラバン in 播磨” が開催されました



10月31日(土)に「未来の教室 in 播磨」～播磨から仕掛ける「未来の教室」～が開催されました。13時から17時までという4時間のフォーラムでしたがとても内容が濃く、あっという間の4時間であり、濃い時間だったのでどっと疲れた4時間でした。

本当に暖か味のあるフォーラムを運営していただいた「播磨人づくりコンソーシアム」のみなさん、「GHG.HIMEJI」のみなさんお疲れさまでした。

第1部では“経済産業省「未来の教室」プロジェクト～教育イノベーションの政策の現在地点～”をテーマに「播磨人づくりコンソーシアム」の前田先生のお話、そして経産省の浅野室長のお話でしたが、前田先生の「播磨人づくりコンソーシアム」の取組の話の後なので浅野室長もいつもよりお話に熱がこもっていたように感じました。

第2部は「ICT化で子どものチャレンジの可能性はどう広がるのか」をテーマに、まず“Google for Education”日本統括の小出さんによるお話、国際大学グローバル・コミュニティセンター准教授の豊福先生、姫路市総合教育センター指導主事の坂田先生、そしてGHG.HIMEJIの共同代表の三野先生によるまたまた熱いセッションでした。小出さんの話の中で「イノベーションは、1人の天才から生まれるのではない。多様な人材で構成されるチームの力を最大化してこそ生まれる。自律的な働き方を実現するためのカルチャーが重要。」といった話は今後の「学校づくり」や「社会に開かれた教育課程」をすすめる組織として重い言葉だなと感じました。

豊福先生、坂田先生、三野先生の3人による姫路市のクロームブック導入の周辺のお話では、豊福先生のICTは使わなければ効果は得られないといった話は刺激的であり、坂田先生の日常化に向けての授業以外での活用の話、三野先生の縦の研修から横の研修といった研修の進め方の話などとても参考になるものでした。

第3部の「社会の中での挑戦の機会」をテーマに白川寧々さん、福本理恵さん、前田先生の3人からの提案のあと、浅野室長のコーディネートのもとでの対話はどの方もとても個性的で刺激的オーラを出されているので滅茶苦茶面白かったです。

「未来の教室 in 播磨」～播磨から仕掛ける「未来の教室」～はすでにYouTubeに公開されていますので是非見ていただけたらと思います。ただ長時間(約3時間35分)にわたりますので、第1部、第2部、第3部と時間のある時に分けてみていただけたらいいのかなと思います。

播磨から仕掛ける「未来の教室」-「未来の教室」キャラバン in 播磨-

You Tube 検索:「未来の教室」キャラバン in 播磨

https://www.youtube.com/watch?v=bTDZz_aIuEU

第1部 “経済産業省「未来の教室」プロジェクト 0:00～
～教育イノベーションの政策の現在地点～”

第2部 「ICT化で子どものチャレンジの可能性はどう広がるのか」 約00:56:00～

第3部 「社会の中での挑戦の機会」 約02:00:00～

(文責:北本)